



木星の世界～縮む大赤斑^{だいせきはん}

大赤斑が小さくなっている話は、「木星の世界～大赤斑」でもしましたが、それを実感できるよう、46年間^{へだ}を隔てて^と撮られた2枚の写真を比べてみました。左は、1974年、右は今年の大赤斑が見える木星の写真です。比べてみるとずいぶん小さくなっていることが分かります。



左：1974年11月
Pioneer 11号撮影
Pioneer Odysseyより
右：2020年4月18日
V.dellVecchia氏（イタリア）撮影
大赤斑の大きさの違いに
注目してください。

大赤斑はその痕跡を探すと、1831年まで^{さかのぼ}遡ることができます。1879年までは赤かったという記録はありませんが、ずいぶん大きかったことは分かっています。その後、じょじょに^{きろく}縮んで、1970年代には^{けいどほうこう}経度方向の大きさが23度くらい、現在では15-6度くらいまで小さくなりました。大赤斑はこのまま小さくなって消えてしまうのでしょうか？ それはいつ頃なのでしょう？ 小さくなり方を研究している人からは、あと数十年という意見が聞かれます。また、別の人はまだ100年くらいは持つと言います。みなさんの中には、大赤斑が消えるところを目撃する人もいるのではないのでしょうか。

（解説員：田部一志^{かいせついん たべいし}）